

野田宇太郎旧蔵「五足の靴」書写原稿に関する一考察

野田宇太郎文学資料館 高 木 恵

A Study on the Transcribed Manuscript of "Five Pairs of Shoes" in the Collection of Utaro Noda

Megumi Takaki

【要約】

詩人・編集者・文学散歩考案者だけでなく近代文学研究者としての野田宇太郎の業績は、長い間世の人々から忘れ去られていた明治末期の文芸運動〈パンの会〉の再評価や幻の紀行文「五足の靴」の再発見にあるといえる。「五足の靴」の著者は与謝野寛、平野萬里、北原白秋、太田正雄（木下杢太郎）、吉井勇というメンバーであったにも関わらず、「五人づれ」という名での投稿であったことにより、後世においてもその存在は忘れ去られたものとなっていた。野田の再発見により「五足の靴」の内容やそれを書いた詩人たちの当時の経歴の再考がなされるようになる。本稿は、野田宇太郎文学資料館に収蔵されている野田直筆の「五足の靴」書写原稿の紹介とその意義を考察することを目的としたものである。

【キーワード】 野田宇太郎、五足の靴、パンの会、近代文学、木下杢太郎

I. はじめに

野田宇太郎とは、戦前の昭和5（1930）年から詩人として活動をし、戦中・戦後にかけて文芸雑誌の編集者として活躍をし、戦後の1950年代からは『新東京文学散歩』（東京讀書新聞、1951）を刊行して以降約30年をかけて文学散歩シリーズを世に出してきた人物である。詩人・編集者・文学散歩創立者以外にも近代文学研究者としての顔を持つ野田は、昭和22（1947）年時点で完全に世の人々から忘れ去られていた紀行文「五足の靴」の再発見、明治末期の文芸運動〈パンの会〉の再評価を行い、日本近代文学史上重要な役割を果たしている。野田にとって唯一無二の人生の師と仰いだ太田正雄（木下杢太郎）に関する研究は、特に力を入れている。『木下杢太郎全集』（岩波書店、1948-1951）の刊行に尽力したことや、上記の「五足の靴」〈パンの会〉双方に太田正雄（木下杢太郎）が深く関わっていることを見れば疑いようがない。

野田宇太郎の生誕の地（福岡県小郡市松崎）に程近い野田宇太郎文学資料館には、野田の遺言により野田旧蔵品である約3万点の図書や資料が収蔵されている。当資料館は開館から36年を経ているが、図書以外の未整理資料が存在しているのが現状である。

本稿で取り上げるものは、野田旧蔵品の中でも野田直筆による「五足の靴」書写原稿とな

る。この原稿は誤植の多かった東京二六新聞の抄写であるために内容に誤記・脱字の多いものといえる。しかしながら、野田宇太郎による紀行文「五足の靴」の再発見、そして野田宇太郎著『パンの會』（六興出版、1949）での一般読者への公開という点で見ると非常に貴重な資料といえる。未公開原稿を發表することによって、野田宇太郎による紀行文「五足の靴」研究の一環を担った資料としての存在を世に示すことが本稿の目的となる。

Ⅱ. 紀行文「五足の靴」

「五足の靴」とは明治40（1907）年の夏に明星の新詩社同人である与謝野寛、平野萬里、太田正雄（木下杢太郎）、北原白秋、吉井勇の5人による九州旅行の紀行文のことである。この紀行文は、九州から都度原稿を東京の二六新報社へ郵送され、それが東京二六新聞に全29回連載された。紀行文の著者名は個人連名ではなく「五人づれ」と称し、新聞へ掲載されたものである上に、紀行文にも5人はそれぞれK生、B生、M生、H生、I生とアルファベット表記で匿名としている。K = 与謝野寛、B = 平野萬里、M = 太田正雄（木下杢太郎）、H = 北原白秋、I = 吉井勇と今日では確定されているが、新聞掲載時はそのようなこともなかった。新聞への連載は順番を決めて5人の持ち回り制であったことは紀行文の内容からも判断できる。当時はまだ与謝野以外は大学1年を終えたばかりの全くの無名詩人であったこともあり、旅行中に次々に書いては東京に送った原稿がまともな校正もされずにかき捨て同然の紀行文として取り扱われていたらしいことは、新聞掲載時の誤植の多さから容易に推測できる。

この紀行文は「五足の靴が五個の人間を運んで東京を出た」との書き出しから始まり、主語が「五足の靴」と書かれている点はユーモラスと言えよう。新聞記事掲載日は当然だが確定されている（明治40年8月7日～9月10日）ものの、その記事を書いた詳細な日付が紀行文の何処にも書かれていないために、旅の日程は推定の域を出ないものとなっている。「五足の靴」の行程は表1の通りである。

当時の平野・太田・北原・吉井は共に与謝野寛の新詩社「明星」派に属した若き詩人たちである。与謝野が35歳、平野・太田・北原が23歳、吉井が22歳とその姿は福岡の西公園で撮られた記念写真からもさながら与謝野を引率者とした修学旅行生のようにであり、紀行文の内容も非常に瑞々しいものとなっている。

東京二六新聞に全29回連載された紀行文「五足の靴」は匿名ということもあり、長らく人々から忘れ去られていた存在となっていた。野田は終戦後間もない昭和22（1947）年、太田正雄（木下杢太郎）の遺稿整理の際に昭和17（1942）年5月に書かれた「明治末年の南蠻文學」と題された回想記の中から「五足の靴」に関する記述を発見する。この回想記をきっかけに幻の紀行文となっていた「五足の靴」が再発見されることとなるのである。雑誌「國文學解釋と鑑賞」（昭和17年5月号）の「明治末年の南蠻文學」には以下のように書かれている。

我々七月の末から九州旅行を始めました。その先々から記事を作って二六新報に送りました。『五足の鞋』といふのが其表題でしたが、残念ながらこの切抜は無くしてしまひました。（一部抜粋）

表1 「五足の靴」行程表（ブックレット2『五足の靴』——九州旅行と南蛮文化より著者編集）

「東京二六新聞」		推定行程日 および宿泊地	野田宇太郎推定行程日			
小題目	掲載日		『パンの會』	『日本耽美派の誕生』	『日本耽美派文學の誕生』	『五足の靴・柳河版』
(1) 巖島	8/7	7/30 下関	7/29頃	7/30	7/30	7/30
(2) 赤間が関	8/8					7/31
(3) 福岡	8/9	7/31 福岡	7/31	7/31	7/31	8/1
(4) 砂丘	8/10	8/1 柳川	8/1	8/1	8/1	8/2
(5) 潮	8/11	8/2 柳川	8/2	8/2	8/2	
(6) 雨の日	8/12	8/3 佐賀	8/3	8/3	8/3	8/3
(7) 領巾振山	8/13	8/4 唐津	8/4	8/4	8/4	8/4
(8) 佐世保	8/15	8/5 佐世保	8/5	8/5	8/5	8/5
(9) 平戸	8/16	8/6 平戸 8/9 長崎	8/6	8/6	8/6	8/6
(10) 荒れの日	8/19	8/8 天草、富岡	8/9	8/9	8/9	8/9
(11) 蛇と墓	8/20	8/9 大江	8/10頃	8/10頃	8/10頃	8/10頃
(12) 大失敗	8/21					
(13) 大江村	8/22	8/10 牛深	8/11頃	8/11頃	8/11頃	8/11頃
(14) 海の上	8/23	8/11 島原	8/12	8/12	8/12	8/12
(15) 有馬城趾	8/24	8/12 熊本	8/13	8/13	8/13	8/13
(16) 長洲	8/25		8/14	8/14	8/14	8/14
(17) 熊本	8/26		8/15	8/15	8/15	8/15
(18) 阿蘇登山	8/27					8/13 阿蘇、垂玉
(19) 噴火口	8/28	8/14 阿蘇、栃木	8/16	8/16	8/16	
(20) 画津湖	8/29	8/15 熊本	8/17	8/17	8/17	8/17
(21) 三池炭坑	8/30	8/16 柳川	8/18	8/18	8/18	8/18
(22) みやびを	9/2		8/20	8/20	8/20	
(23) 柳河	9/3	8/17 柳川	8/21	8/21	8/21	8/21
(24) 徳山	9/5	8/18 徳山	8/23	8/23	8/23	8/23
(25) 月光	9/6	(8/19 車中泊)	8/24	8/24		
(26) 西京	9/7	8/20 京都	8/26	8/26	8/25	8/25
(27) 京の朝	9/8	8/21 車中泊	8/27	8/27	8/26	8/26
(28) 京の山	9/9		8/28	8/28	8/27	8/27
(29) 彗星	9/10		8/29	8/29	8/27・28	

野田は「二六新報」は「東京二六新聞」の、「五足の鞋」は「五足の靴」の記憶違いであるとし、明治40（1907）年の夏の東京二六新聞の紙面上に「五足の靴」の連載記事を見つけることに成功した。

幻の紀行文であった「五足の靴」は野田の手により、『パンの會』において「五足の靴」の各回の小題目・掲載日・推定日程、「博多に於ける記念撮影」の写真、解説と九州旅行後の南蛮文学に与えた影響などが記され紹介された。次いで、野田宇太郎著『日本耽美派の誕

生』(河出書房、1951)でも「五足の靴」の各回の小題目・推定日程・掲載日、各回の解説とその後の南蛮文学の初期作品などに関して記している。しかし、これら2冊の中では「五足の靴」の全文は掲載されていない。

東京二六新聞掲載以降、「五足の靴」全文が何らかの刊行物に記載されるのは、『現代紀行文学全集 第5巻』(修道社、1958)となる。また、その後刊行された『現代日本紀行文学全集 南日本編』(ほるぷ出版、1976)、『明治紀行文学集 明治文学全集 第94巻』(筑摩書房、1974)にも「五足の靴」の全文が掲載されている。当時の東京二六新聞の誤植の多さにより、誰かが再編集しなければ研究材料にはなり得ない状態であるとし、野田は「ほぼ原型のままでわたくしの薦めで『日本紀行文学全集』にも搭載したことがあるので、それを見ればわかることである」と『柳川版 五足の靴』(ちくご民芸店、1978)のおぼえがきで書いているが、『日本紀行文学全集』という本は存在しないために、上記の3冊のうちのどれかがそれにあたると思われる。

野田本人が直接編著に関与し、東京二六新聞掲載の「五足の靴」を再編集し誤植などを可能な限り排除した全文記載本として、『日本耽美派文学の誕生』(河出書房新社、1975)と『柳川版 五足の靴』の2冊がある。当時の掲載に最も近い状態を示し、掲載日も推定日も書かれていないものとなる。

野田の死後(1984年死去)に出版されたものとして2冊、『白秋全集 第19巻』(岩波書店、1985)、五人づれ著『五足の靴』(岩波文庫、2007)がある。

Ⅲ. 野田宇太郎による書写原稿

野田宇太郎文学資料館に収蔵されている「五足の靴」の原稿用紙は大きさ横36cm×縦26cm、全66枚である。1枚目と66枚目の劣化が激しく破損している部分もあるが、2～65枚目は経年劣化による紙の変色はあるものの大きな破損もない。

写真1のように小題目の下に新聞紙面では書かれていない掲載日を記載している。新聞紙面上で

の改行はほぼ無いが、書写原稿では抄写者により改行がなされている部分も多い。

この書写原稿の筆跡は他の直筆原稿などとの比較により野田宇太郎のものであると確定できる(写真2～4参照。左が『新東京文学散歩』草稿、右が書写原稿となる)。

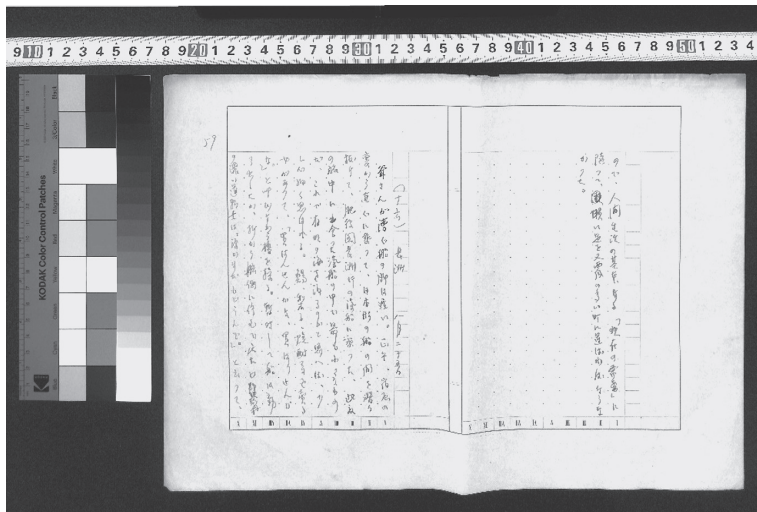


写真1 野田宇太郎直筆の「五足の靴」原稿

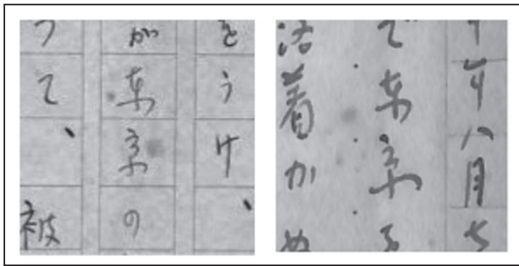


写真2 筆跡比較【東京】

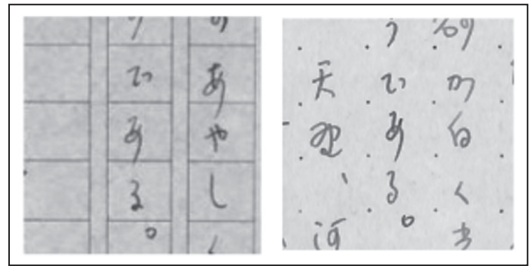


写真3 筆跡比較【である】

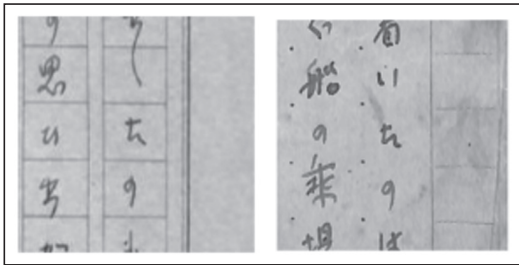


写真4 筆跡比較【た】

さらに、比較的気軽に様々な資料に書き込みや校正をする野田の書き込みがほぼ無いこともこの書写原稿の特徴ともいえる。

また、この書写原稿は、東京二六新聞紙面に掲載されていた文章に対し、明らかな誤植と思われる部分の修正や改行・掲載日の追加以外の違いは見出すことができず、極めて必要最低限の修正を加えただけの複写物を目指したものだという印象を受ける。

野田は昭和22（1947）年に「五足の靴」再発見のきっかけとなる太田正雄（木下杳太郎）の回想記を見つけ、実際に東京二六新聞紙面上にて「五足の靴」を再発見することとなる。野田宇太郎著『混沌の季節』（大東出版社、1971）には、

明治四十年夏から秋に「二六新聞」に「五人づれ」の署名で掲載されていた「五足の靴」という紀行文をようやく見つけ出して、それを太田教授の東大での学生だった曾根医学士にたのみ、明治大正新聞雑誌資料室で筆記してもらったのは、六月のはじめである。それは東大医学部学生だった太田正雄（木下杳太郎）も加わった、雑誌「明星」の、与謝野寛、北原白秋、平野万里、吉井勇の五人連れによる、九州旅行のリレー式紀行文であった。杳太郎の本格的詩作はその旅にはじまっていた。唐津、平戸、長崎、島原、天草などでキリシタン史との邂逅は、杳太郎や白秋に異国情調の詩をはぐくみ、それから一年数ヶ月後に隅田川のほとりのレストランからはじまる耽美主義文学運動の「パンの会」とも無縁ではなかった。「五足の靴」のコピーが出来ると、わたくしの『パンの会』の執筆はいよいよ速度を増した。

と紀行文発見前後の事が書かれている。文中に出て来る明治大正新聞雑誌資料室は、現在の東京大学大学院法学政治学研究科附属・近代日本法制資料センターの明治新聞雑誌文庫のことかと思われる。

本稿の著者は、就任当初に文学資料館前任者から、この原稿は曾根医学士によるものだと教えられ納得していた。というのは、新聞掲載時のままの文章を書き写して一次資料のようなものとして、書き込み等をせずに本文がきちんと読める形で保持していたとしても不思議ではないと考えたからである。コピー機が一般に普及するのは1951年以降であるために、この当時刊行された書籍以外の文字情報を手元に置こうとすると人の手による書き写し作業が必須となり、書き写し資料の価値は現在よりも高いものとなっていたと容易に推測できる。

しかしながら、実際には資料館に収蔵されている書写原稿は曾根医学士のものではなく、野田筆跡のものであった。野田が最初に「五足の靴」全文を研究資料として掲載した『日本耽美派文学の誕生』のために書き写したもののかと当初は考えたが、書き写した際の修正箇所以外に加筆も修正もされていない点に疑問が生じた。そのために、新聞掲載時の本文をもとにこの原稿と『日本耽美派文学の誕生』(①)、『柳川版 五足の靴』(②)、1958年出版『現代紀行文学全集 第5巻』(③)及び1976年出版『現代日本紀行文学全集 南日本編』(④)掲載の「五足の靴」文面との比較を行った。結果は表2のようになった。

表2 各種媒体による差異

著者作成

	原稿用紙	①	②	③	④
新聞との差異	△	○	○	×	○

○=大いにあり △=明らかな誤植のみ修正 ×=ほぼ新聞掲載ママ

表2からは、この書写原稿は『現代紀行文学全集 第5巻』に次いで、東京に六新聞に掲載された文章に近いものであるといえる。

つまり、この野田直筆の書写原稿は野田が曾根医学士でに依頼し、手に入れた原稿を何らかの理由で手元から失う際に自ら書き写したものである可能性がある。仮にこの原稿用紙が全文を初めて掲載した『日本耽美派文学の誕生』のものであるとするならば、誤植以外の野田が修正した箇所の訂正が書き込まれていないことに疑問が生じる。

この原稿は曾根医学士が書き写した原稿が経年劣化したためや、もしくは他の理由、例えば『柳川版 五足の靴』のおぼえがきに「ほぼ原型のままでわたくしの薦めで『日本紀行文学全集』にも搭載したことがある」とあるように、掲載を勧めるにあたり曾根医学士の原稿を提供したために作られた可能性が考えられる。そう考えると野田自身が東京二六新聞から直接か、曾根医学士の書写原稿からかは不明であるが抄写したもので、<パンの会>や明治末期の耽美派文学の研究をする上で重要な資料として書き込みなどを行わなかったことには納得できる。

1958年に刊行された『現代紀行文学全集 第5巻』の「五足の靴」の項には、野田による多くの修正・書き込み・推測などが書き込まれ、この本の出版により野田にとっての「五足の靴」研究の本文資料が書写原稿から出版刊行物へと移行したと考えられる。なお、1976年刊行の『現代日本紀行文学全集 南日本編』の掲載文は『日本耽美派文学の誕生』やこの2年後に刊行される『柳川版 五足の靴』とほぼ同じで東京二六新聞掲載時の誤植を大いに修正したものとなっており、所蔵していたにも関わらず野田による書き込みは一切なされ

ていない本となっている。この事から、野田が柳川版のおぼえがきに書いた『日本紀行文学全集』とは1958年刊行の『現代紀行文学全集』の事を指し示しているものと推測される。

IV. 書写原稿の意義

野田宇太郎直筆の「五足の靴」書写原稿は、書き写し時以外での修正や訂正が全く見られない点に特徴を見出すことが出来る。この点に関しては、前述したとおり太田正雄の教え子である曾根医学士に依頼して書き写させた東京二六新聞掲載の「五足の靴」原稿が何らかの事情で野田の手元から離れるために自らの手で書き写したものと推定できる。それが経年劣化などの物理的事情によるものか、もしくは『日本紀行文学全集』の出版社に対し「五足の靴」を薦める際に編集者がわざわざ明治大正新聞雑誌資料室まで向かず済むように曾根医学士の原稿用紙を渡したといった仕事上の事情によるものか、詳細は推測の域にとどまる。後者について、仮に出版される全集に「五足の靴」が収録されるのであれば、太田正雄（木下空太郎）の功績の一つともいえる「五足の靴」の一般普及がなされるため、野田の書き写しの手間も納得できる。曾根医学士の原稿が『日本紀行文学全集』の出版社に渡ったのであるのならば、野田宇太郎旧蔵品の中に曾根医学士の原稿用紙が存在しないことにも繋がる。

「五足の靴」再発見に関するおおよその時系列事項は表3の通りである。

表3 「五足の靴」関連の出来事著者作成

日付	出来事
明治40（1907）年	東京二六新聞に「五足の靴」掲載
昭和17（1942）年	木下空太郎、回想記にて明治40年の九州旅行の思い出を書く
昭和20（1945）年	木下空太郎死去
昭和22（1947）年	野田、木下遺品整理中に上記の回想記を見つける
	野田、明治大正新聞雑誌資料室で記事発見
	野田、曾根医学士へ筆記依頼（書写原稿入手）
昭和24（1949）年	野田『パンの會』にて「五足の靴」を紹介・研究
昭和26（1951）年	野田『日本耽美派の誕生』にて「五足の靴」を紹介・研究
昭和33（1958）年	『現代紀行文学全集 第5巻』刊行★
昭和46（1971）年	野田『混沌の季節』にて「五足の靴」発見のいきさつを紹介
昭和49（1974）年	『明治紀行文学集 明治文学全集 第94巻』刊行★
昭和50（1975）年	野田『日本耽美派文学の誕生』にて「五足の靴」全文を記載★
昭和51（1976）年	『現代日本紀行文学全集 南日本編』刊行★
昭和53（1978）年	野田『柳川版 五足の靴』刊行★

★ = 全文記載

『パンの會』に「五足の靴」の再発見を掲載し、『現代紀行文学全集 第5巻』が刊行されるまでの約9年間は、紀行文「五足の靴」全文が記されたものは29日分の東京二六新聞とそれを書き写した原稿用紙66枚だけである。いわばこの書写原稿は、一次資料に匹敵する重要

な資料として野田から取り扱われていたのであろうことは想像に難くなく、このことは野田による書き込みが一切なされていない理由としても十分だと思われる。

V. おわりに

野田宇太郎文学資料館には野田宇太郎旧蔵の約3万点の図書や資料が収蔵されている。野田自身が詩人であり編集者・文芸評論家・近代文学研究家であったためにその中心となるのは近代から現代にかけての文学となるが、芸術（美術）・文化・歴史・医学・交通・地誌・観光・宗教・自然科学・言語・教育・博物館と実に多彩であり多岐にわたっている。また、図書以外にも文学散歩の取材旅行に際して使った各種の地図やガイドブック、各地で撮った写真、収集した郷土玩具や絵葉書。式典の次第・記念品や幸田露伴の羽織など、資料に関しても豊富な種類を誇っている。

開館して約36年が経ち図書の基本的な整理はほぼ終わっているが、専門職員の人手不足に加え、書誌カードからデジタル情報管理への変化での情報伝達不足のために、資料に関しては未整理のものが残されているという課題が存在している。

本論文を執筆するにあたり、当初は書き込みが一切なされていないものであるために、この書写原稿は曾根医学士のものだとして様々な比較などを行っていたが、途中から野田宇太郎直筆原稿であることが判明した。いずれにせよ、この書写原稿が野田宇太郎にとって人生の師と仰いだ木下杢太郎（太田正雄）の明治末期の近代文学史への貢献を世に広めるうえで貴重な資料であったことは否めない。東京二六新聞紙面上に幻だった紀行文「五足の靴」を再発見した1947年から『現代紀行文学全集 第5巻』が1958年に発刊されるまでの約11年間、全文が記載された貴重な原稿として存在し続けたものである。この原稿用紙の存在は、これまで資料館内でのみ知られる存在であった。今後はこの原稿だけでなく他の未公開資料も情報公開を積極的に行うことにより資料の有効活用を図りたいと考えている。

参考文献

五足の靴. 東京二六新聞. 1907-08-07~09-10（除く08-14.08-17.08-18.09-01.09-04）

野田宇太郎『パンの會—近代文藝青春史研究—』六興出版社、1949

野田宇太郎『日本耽美派の誕生』河出書房、1951

『現代紀行文学全集 第5巻』修道社、1958

野田宇太郎『混沌の季節』大東出版社、1971

『明治紀行文学集 明治文学全集 第94巻』筑摩書房、1974

野田宇太郎『日本耽美派文学の誕生』河出書房新社、1975

『現代日本紀行文学全集 南日本編』ほるぷ出版、1976

五人づれ著／野田宇太郎編『柳川版 五足の靴』ちくご民芸店、1978

『白秋全集 第19巻』岩波書店、1985

野田宇太郎文学資料館『「五足の靴」—九州旅行と南蛮文化—』野田宇太郎文学資料館、

1993

野田宇太郎文学資料館『小郡市制30周年 野田宇太郎文学資料館15周年記念誌 背に廻った未来』野田宇太郎文学資料館、2002

野田宇太郎文学資料館『「五足の靴」百年—南蛮文学の誕生とその広がり—』野田宇太郎文学資料館、2007

五人づれ『五足の靴』岩波書店、2007

町田市民文学館ことばらんど『開館10周年記念 野田宇太郎 散歩の愉しみ 展—〈パンの会〉から文学散歩まで—』野田市民文学館ことばらんど、2017

※書名、雑誌名、記事名の漢字表記は刊行当時の表記に準じている。